

近代水道の歴史を物語る壮麗な遺産

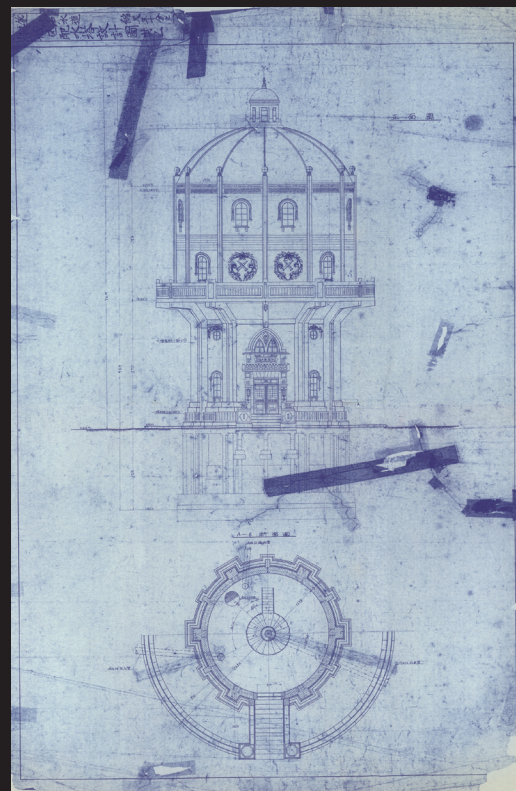
茨城県水戸市に昭和7(1932)年に近代水道施設として建設された水戸市低区配水塔は、高さ21.6m、直径が11.2mの円筒形の鉄筋コンクリート造の塔で、水戸市街の低地部(下市)に給水を行う配水塔である。配水塔の外壁面にはレリーフが、1階入口にはゴシック風の装飾がそれぞれ施されるなど、近代水道にかける当時の水戸市民の思いが込められている。

本配水塔の給水区域である水戸市下市(しもいち)は、水戸藩が寛永2(1625)年からはじめた城下町整備によって新しく開かれた街であり、那珂川と桜川に挟まれた低地であったため、井戸の水質が悪く飲料水には適さなかった。当時は、日本で18番目の水道となる、台地の法面からの湧水を水源とする笠原水道の建設により、上水の供給を行った。明治に入り、新たな水道の敷設をめざす動きが大きくなったが、日露戦争の開戦などの問題もあり、上水問題はなかなか解決しなかった。その後、昭和7(1932)年ようやく近代的な浄水場を備えた配水塔が竣工し、水戸市街地全体を給水区とした近代水道が完成した。浄水場から流れてくる水をいったん配水塔にためることで、各家庭に届く水道の水圧を一定にし、水を安定供給できるようになった。

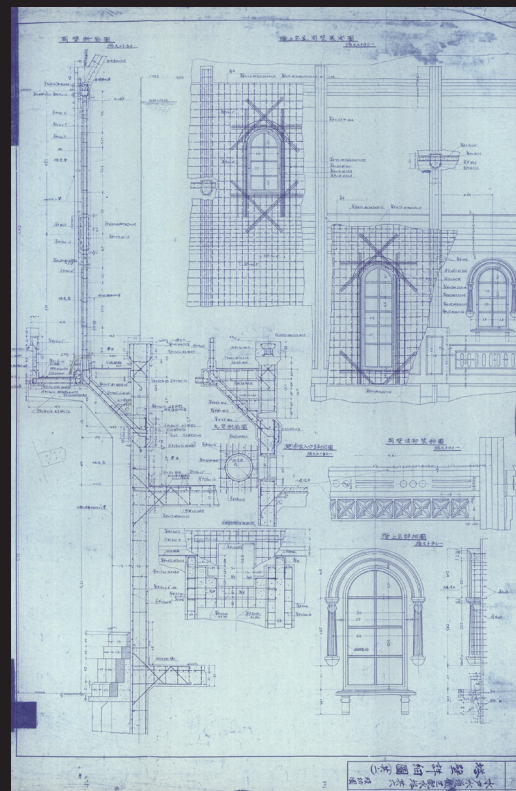
低区配水塔の設計及び工事監督は水道技師の後藤鶴松が行い、工事は、高砂鉄工株式会社が請け負った。配水塔の中央にはバルコニー風の回廊がせり出し、それを境に上部正面の2カ所に消防ホースをシンボライズしたといわれるレリーフが彫られている。当時の水道が飲料だけではなく、消防用水としての役割も担っていたことを表している。また、10カ所ある丸窓にもレリーフが飾られ、上部がアーチ状になった長窓もある。1階入口の上部には、ゴシック風装飾が施され、少し上がったアーチの中に丸まった三角窓が組み込まれるなど、細部にまで凝った造りとなっている。中の構造は、1階に事務室があり、中央の穏やかな螺旋階段を2階に上がっていくと、鋼製水槽の底面が塔をふさぐように広がっている。鋼製水槽の内径は8m、水深は6.5m、容量は358㎡である。鋼製水槽の特徴の1つとして、接合部がすべてリベット止めになっている。また、同敷地内に、量水棟も設置されており、同時期に設置されたものである。

水戸市低区配水塔は、昭和60(1985)年に近代水道100選に選ばれ、平成8(1996)年には、国の登録有形文化財に登録された。同時期に建設された配水塔が廃止されていく中、下市を潤し続けていたが、平成11(1999)年をもって67年間の水道施設の役割を終えた。しかしその後も、水戸の近代水道の象徴として保存されており、現在は、建設当時の淡い水色と肌色のコントラストが映える外観に補修されている。

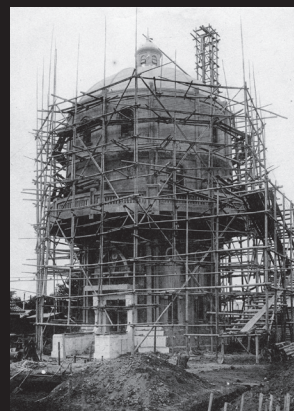
水戸市低区配水塔は、上水問題と消防問題で苦しんだ水戸の歴史と近代水道の素晴らしさを今に伝える貴重な近代化遺産である。現在は、水戸市が周辺を小さな公園化することによって人々とふれあいやすい環境を作るなど、行政と市民の手で大切に保存している遺産である。(澤島 守夫)



1.配水塔設計図 其ノ一



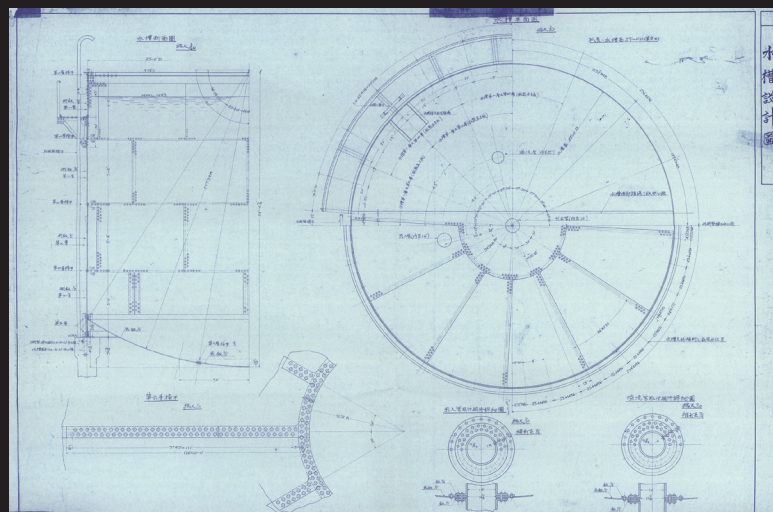
2.塔壁詳細図 其ノ一



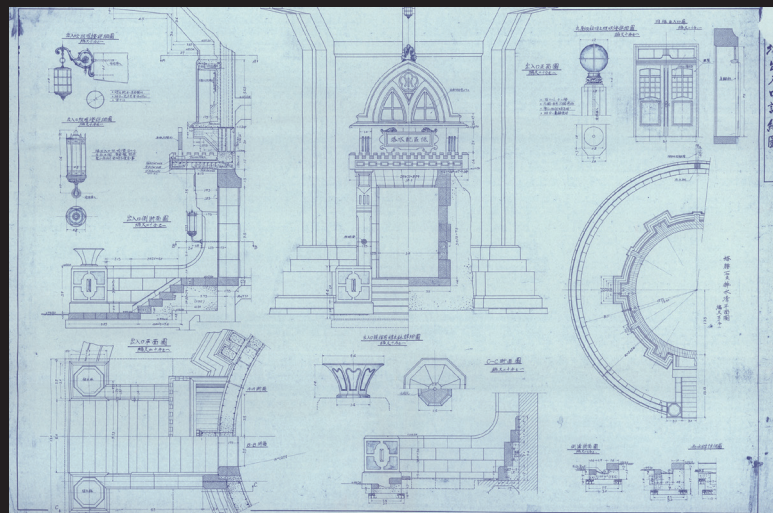
3.配水塔施工中の様子



4.市内の水道工事の様子



5.水槽設計図



6.塔出入口詳細図



7.現在の水戸市低区配水塔



8.配水塔の内部(右が水槽)



9.水槽底面



10.配水塔内部(1階)